第４章

特徴的な学校の取組

・鳥取市立修立小学校
・鳥取市立国府東小学校
・鳥取市立鹿野学園
・米子市立福生西小学校
・米子市立後藤ヶ丘中学校
・境港市立中浜小学校

　児童生徒の学力の伸びが大きかったり、非認知能力・学習方略の数値が高かったりした学校を訪問し、学校で意識して取り組んでいることを聞き取りました。
　児童生徒の学力の伸びや、学力の下支えとなる非認知能力や学習方略を高めるために効果があると思われる取組を紹介します。

人間関係づくりと
『わかる・できる・身につく』授業づくりで児童を育成
～鳥取市立修立小学校～

１　とっとり学力・学習状況調査の状況

【学力レベル】算数の「学力の伸び率」が県平均を大きく上回る。
【主体的・対話的で深い学びの実施】県平均を上回るとともに伸びが顕著である。
【学習方略】すべての項目において伸びが顕著である。
【非認知能力】自己効力感が県平均を上回るとともに伸びが顕著である。

２　効果があると考えられる取組

修立小学校では、自己肯定感を高める人間関係づくりに取り組むことで、学習を支える基盤を整えると同時に、タイムマネジメントをはじめとする「わかる」「できる」授業づくりに全員で足並みをそろえて取り組んでいる。これらが相互に作用し、学力の伸びにつながっていると考えられる。

（１）児童も教職員も自己肯定感を高める人間関係づくり

修立小学校では、３つのプロジェクトを中心とした学校運営組織が組まれている。その中の一つ、「やさしくプロジェクト」の取組が、児童の人間関係づくりの要となっている。児童同士、教職員同士、児童と教職員との良好な関係が、児童が安心して登校できる学校づくりにつながると共に、学習を支える基盤となっている。

①「つながりタイム」で関係づくり

毎週水曜日の昼休憩１０分程度を使い、人間関係づくりの取組が行われている。中でも、５、６年前から月１回行われている「ほめ言葉のシャワー」は、効果が大きい。学級の実態に応じて人数等をアレンジしながら、３、４名のグループを組み、「今日の主人公」を決めてグループのメンバーがその児童に対してほめ言葉を伝える。児童はほめ言葉のお手本「○○の時、○○をしていましたね。○○の力があると思います。そんな○○さんは○○だと思います。」を元に、その行動や発言を価値づける言葉（価値語）を考えて相手に伝える。その日の主人公を時間いっぱいほめ、その後は「今日の主人公」がほめられた感想を伝える。価値語を考えさせることで、それらを学級の中で広め、良さを全体につなげていく。同じことは、月１回、職員会議でも教職員の間で行われる。普段はなかなか言えないほめ言葉も、この時間なら素直に出せる。もとは、自己肯定感が低いという児童の実態があったことから始まった取組で、児童一人一人の自己肯定感を高めることをねらっている。実際、児童の自己肯定感は児童アンケートから徐々に高まってきていることがわかり、この活動が自己効力感の高さにつながっていると思われる。

「ほめ言葉のシャワー」

「心を一つに」「みんなで協力」などの価値語が書き込まれている。

「すてきな修立っ子」の写真

②「すてきな修立っ子」の掲示

児童が友だちとつながる姿や頑張る姿等、児童の素敵

な写真を普段から撮影しておき、これらの写真を児童玄関や各教室に掲示している。児童玄関前のコーナーの写真は、職員会議で担任が持ち寄った選りすぐりの一枚に、教職員が手分けしてコメントを入れたものである。また、その隣のコーナーには「あったかボード」という小さな縦長のホワイトボードが置かれ、月１回担当教職員が児童に向けてメッセージを書いている。内容は、クイズや行事に対するコメント、人権啓発など、多岐にわたる。これらの取組からは、教職員が児童を認め、あたたかく支えている様子が伝わってきた。このような掲示物が、児童が落ち着いて学校生活や学習に向かうことができる環境づくりの一翼を担っていると考えられる。

１１月の「あったかボード」は「雲」について。理科の学習につながります。

（２）「どの子も『わかる・できる・身につく』授業づくり」の徹底

修立小学校は２年前から算数科を中心として研究に取り組み、「『わかる喜びと楽しさ』を味わい、『わかる・できる・身につく』授業づくり」について実践を重ねている。実践の中でも特に、タイムマネジメントについては、「どの学級も必ず、誰がいつ授業を見ても、誰にいつ見られてもやっている」と言えるように、徹底して取り組んでいる。以下の取組は、学習方略の柔軟的方略、プランニング方略、作業方略、努力調整方略の育成につながっていると考えられる。

①「まとめまで３０分」のタイムマネジメント

適用題・練習問題の時間を確保するため、授業のまとめを授業開始から３０分以内に終えることを基本としている。導入に時間をかけないことで、授業の残り時間１５分を適用題・練習問題に充てている。また、導入では、児童の知的好奇心を高めるため、フラッシュカードや音読計算を取り入れたり、具体物や操作的活動等を取り入れたりして、児童が問題を解きたくなるような意欲づけの工夫を行っている。さらに、タブレット等を効果的に活用している。例えば、算数の苦手な児童やノートに書くことが苦手な児童に対して、クラスルームを使って問題を提示し、ノートかタブレット等端末かどちらか使いやすい方を選んで問題を解けるように工夫している。タブレット等端末を使うことで、苦手な児童も意欲的に取り組む姿が見られるようになってきた。

ICT 機器の活用

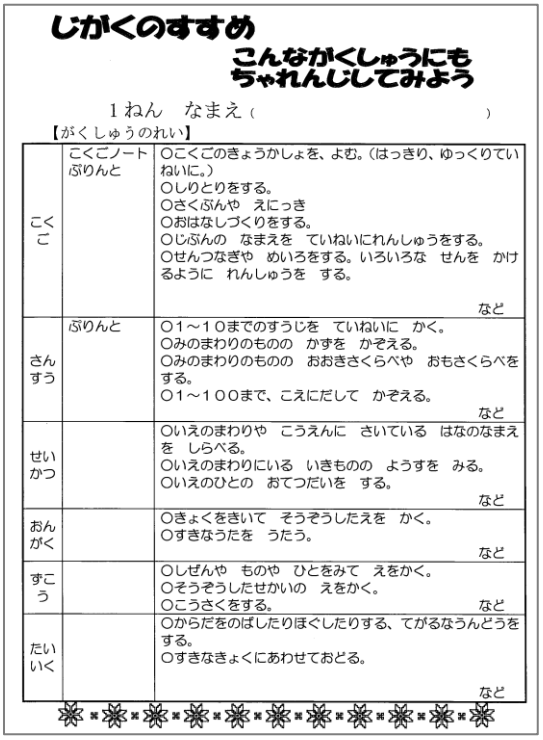
5年生「図を使って考えよう」導入の様子。
テープ図を使った問題をフラッシュカードで復習する。

②学年に応じた「自学のすすめ」

１年生用、２年生用、３・４年生用、５・６年生用と、発達段階に応じて学習の手引きを作成している。もとは、自主学習（自学）で何を学習すればよいのかわからない児童への手立てとして作成していたものである。体育や音楽も含め、全ての教科の内容に対して具体的な自主学習（自学）が提案してあり、内容は随時教師が精査し、修正を加えながら児童に示している。

③「よいノートの日」で自分の学びを調整する

月１回行われる「よいノートの日」には、児童それぞれが渾身の１ページを提示し、各学級で互いのノートを見合って評価が行われる。友だちのノートを見ることで、自分の学習を振り返り、自分の学習方略を見直す機会となっている。



じがくのすすめ

こんながくしゅうにもちゃれんじしてみよう

１ねん　なまえ（　　）

【がくしゅうのれい】

こくご	こくごノート ぷりんと	○こくごのきょうかしょを、よむ。（はっきり、ゆっくりていねいに。） ○しりとりをする。 ○さくぶんや　えにっき ○おはなしづくりをする。 ○じぶんの　なまえを　ていねいにれんしゅうをする。 ○せんつなぎや　めいろをする。いろいろな　せんを　かけるように　れんしゅうを　する。 など
さんすう	ぷりんと	○１～１０までのすうじを　ていねいに　かく。 ○みのまわりのものの　かずを　かぞえる。 ○みのまわりのものの　おおきさくらべや　おもさくらべをする。 ○１～１００まで、こえにだして　かぞえる。 など
せいかつ		○いえのまわりや　こうえんに　さいている　はなのなまえを　しらべる。 ○いえのまわりにいる　いきものの　ようすを　みる。 ○いえのひとの　おてつだいを　する。 など
おんがく		○きょくをきいて　そうぞうしたえを　かく。 ○すきなうたを　うたう。 など
ずこう		○しぜんや　ものや　ひとをみて　えをかく。 ○そうぞうしたせかいの　えをかく。 ○こうさくをする。　など
たいいく		○からだをのばしたりほぐしたりする、てがるなうんどうをする。 ○すきなきょくにあわせておどる。 など

自己開示力を高め、自らつながり学び合う児童の育成
～鳥取市立国府東小学校～

１　とっとり学力・学習状況調査の状況

【学力レベル】国語、算数の「学力を伸ばした児童生徒の割合」が県平均を大きく上回る。

【学習方略】調査した全学年において複数の学習方略に伸びが見られるが、特に、柔軟的方略、プランニング方略、認知的方略の伸びが顕著である。

めくり台本を使う１年生の司会団

２　効果があると考えられる取組

国府東小学校では、学びの基盤を整える特別活動を中心とした取組と授業改善や家庭学習の工夫等による学力向上の取組の両輪で、学習方略を身につけさせるとともに学力レベルを伸ばしていると考えられる。

（１） 学びの基盤を整える「つながる力」「主体的に取り組む力」

「自分を出すのが苦手で、自信をもって意見を言えない」という児童の実態を踏まえ、令和２年度から特別活動に力を入れている。一人一人の児童が自分の意見を表現できるようになることを全職員が意識し、様々な取組を行ってきた。特に、以下に挙げるような取組を通して、学びの基盤である学級を児童が自己開示できる場に整えることにより、主体的に学びに向かう力をつけたと考えられる。

学級会での話合いの様子

①学級活動で「一緒に考え、よりよい解を考える」基盤づくり

学級活動（１）では、「みんなで決める→実行する→振り返る」のサイクルで、学級活動（２）では、「課題の分析→解決策を考える」というサイクルで自分たちの課題について話合いを行っている。全員が司会団を経験できるよう事前の企画委員会やめくり台本などを充実させると同時に、育てたい力の系統を意識しながら学年に応じた話合いを進めている。さらに、話合いでは否定的な言い方をせず「～が心配です」等、心理的安全性を保つ言い方を推奨することで、みんなが安心して意見を出し合うことのできる関係性を築くように意識している。全員が課題について考察し、意見を出し合い、整理して、よりよい方向を目指して合意形成を図っていく。このような活動を重ねる経験は、自制心等の非認知能力の向上や柔軟的方略、プランニング方略の伸びにつながっていると考えられる。また、低学年を含めた多くの学年で、他の教科等でつながった地域の方や他の学年の友だちとの活動の企画等を議題として扱っている。自分の意見が反映された話合いの成果が学級外・学校外の人々と関わるイベント等に反映される経験は、自己効力感の醸成にもつながると考えられる。

役立ち感を育む地域の方との学習

総合的な学習の時間や生活科、クラブの講師等、地域の方が積極的に関わってくださる。これらの関わりへの感謝が児童たちの原動力になっている。

具体的な活動を意識した話合いは、代表委員会や委員会活動の企画等にも広げられ、学級以外の場でも自分の考えをアウトプットする場を意識して設けている。その成果が、後述する授

業での話合いや教え合い等の協働的な学習を進めるための基盤となっていると考えられる。

②万（よろず）の葉（言葉）でつながる「万葉タイム」

万葉タイム

中学校区の取組として、「万葉タイム」と銘打ち、ソーシャルスキルトレーニングを２週間に１回のペースで行っている。内容は短時間の構成的グループエンカウンターで、ゲーム的な要素を取り入れながら、自分について話したり相手の話を聞き質問したりする。この活動を通して、認め合いながら話し方や聞き方を身に付けつつ、自己開示力を高め、よりよい人間関係を形成することをねらっている。

また、全校の取組として、友だちのいいところを見付けて紹介する「万葉の木」の活動も行われている。これは、各学年で見られた友だちのいいところを一枚の「葉」に書き、毎週それぞれ１つずつ選んで校内放送で紹介し、その「葉」を玄関ホールに掲示するという取組である。

友だちの良さを表した言の葉がたくさん茂る万葉の木

これらの取組のように、自分について話したり、人から自分自身の良さを具体的に示されたりする経験は、自分自身を見つめ直すことにつながり、認知的方略の力の育成にもつながっていると考えられる。

（２）つながりを活かして深める「学び合い」

①見合い、話し合い、教え合う、協働的な「学び合い」

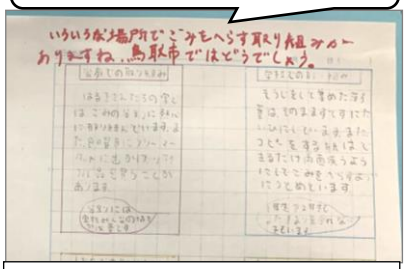
特別活動等で醸成された協働的な関係性を活かし、自力解決の後のグループやペアでの協働的な学び合いを大切に、「互いのノートを見合う」「考えを話し合う」「教え合う」等の活動を行った。また、大切なことは「ノートに書く」「声に出して読む」等のアウトプットに繰り返し取り組んだ。これらの取組を続けたところ、授業後にも児童が板書を前に話し合う姿も見られるようになった。

②既存の問題集を活かした適用題、評価テスト等の工夫

算数の適用題にＢ－ＰＬＡＮ問題集を活用した学年では、取り入れた当初は問題に向かうことも難しかったが、担任の粘り強い取組と声かけで、あきらめずに問題に取り組めるようになってきた。また、チャレンジテスト（６、９、１１、１月に実施）として、小学校算数単元到達度評価問題に取り組んだ学年もある。これらの学年では、多くの児童が学力レベルを伸ばしており、活用問題に継続的に粘り強く取り組んだことが学力の向上につながったと考えられる。

③自主学習（自学）の質を高める

このように、どの子にも先生からの評価を返す。



玄関ホールに掲示された自主学習ノート（一部）

３年生以上で自主学習を宿題として課している。低・中・高学年ごとに内容等の例を示した「自学のすすめ」を作成し、自主学習ノートに貼り、いつでも確認できるようにした。提出されたものに対しては、「次はこれを考えてみたら」「ここはどうなの」等のアドバイスや次につながるヒントなどをコメントする。さらにモデルとなる自主学習ノートを玄関ホールに掲示し、児童の意欲を引き出すとともに、アイデア交流の場をつくるようにした。児童が自主学習ノートを相互評価し、掲示まで自分たちで行う係活動を行っている学級もある。このように、丁寧な指導と評価で自主学習の質の向上を図っている。自分で課題を設定し、評価を受けながら毎日続けられるこの取組は、プランニング能力や努力調整方略、認知的方略の伸びにつながっていると考えられる。

義務教育学校の特色を生かした、目的をもった学び
～鳥取市立鹿野学園～

１　とっとり学力・学習状況調査の状況

【学力レベル】国語、算数・数学ともに「学力レベル」が県平均を上回る。特に、算数・数学の「学力の伸び率」が県平均を大きく上回る。８年生（中学２年生）では、国語、数学ともに「学力を伸ばした生徒の割合」が県平均を大きく上回る。

【学習方略】８年生（中学２年生）で、柔軟的方略、作業方略、努力調整方略の伸びが見られる。

２　効果があると考えられる取組

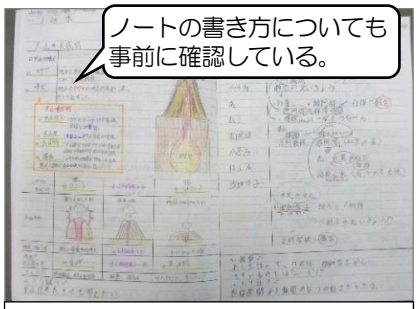
鹿野学園では、３つのブロックの密な連携による安定した学校づくりと生徒の主体的な学習を促す意識づけで学習方略や学力レベルを伸ばしていると考えられる。

（１）７年生（中学１年生）での徹底

①進路を意識させる

鹿野学園は、１・２年生を初等ブロック、３～５年生を中等ブロック、６～９年生を高等ブロックと位置づけた義務教育学校である。生徒が７年生に進級した４月に担任が進路について話をしている。「進路とは何なのか」「それぞれの高等学校の違い」等、３年後を見据えた指導を行っている。また、６年生から９年生が同じ校舎で生活しており、６年生をいわゆる「中学０年生」と位置づけて中学校生活に慣れさせている。このような学校の特色を生かした取組を行っている。

②課題提出の徹底『手順・ルール・マナー』



提出された自学ノート

年度初めの１週間を「黄金の１週間」と位置づけ、課題提出の仕方を指導している。「提出期限を守ること」「ノートに必ず書くことは何か、どのように書くのか」「提出するときの言葉遣いや態度をどうすればよいのか」等、できるようになるまで繰り返し指導をしている。学年主任を中心に各教科担当者が同じように対応することで、生徒の学びの土台作りを複数の職員で行うことができている。このような取組により、課題への取り組み方の基盤を揃えることができている。そのため、その後の生徒自身による学び方の構築という点で、柔軟的方略の伸びにつながっていると考えられる。

（２）学びの集団づくり

①人間関係の構築に向けた指導・支援

豊かな人間関係をもとに、友だち同士が関わり合いながらの学習（ピア・ラーニング）

ＣＯ教員（教育相談担当）や養護教諭からの情報提供、日々の観察等により、各教員が１～９年生の児童生徒の学習面、生活面の状況について把握しやすいところも義務教育学校の良さである。高等ブロックの児童生徒は、保・小・中とほぼ同じメンバーで生活しているため、人間関係

が固定化しやすい環境にある。そこで、７年生担任は、豊かな人間関係の構築のために次の２点で少しずつ人間関係づくりを図っていった。まず、友だちと関わる際に「特定の人としか関わらない」「誰かを疎外する」といったことをせず、適切な距離感で接するようにすること。次に、同年齢との関わりだけでなく異年齢との関わりも大切にするというねらいで、学校行事や部活動への取り組み方を通して人間関係を広げることを生徒に伝え、浸透させていった。

②道徳科における取組

７年生担任は道徳科で「毎時間全員が話す」ことを意図的に行った。生徒はよく話し、より深く主体的に自分のことについて考えるようになった。事前に時間割編成を調整して学年団で道徳科の打ち合わせ時間（道研）を設けた。主発問や授業展開を十分に検討することで、生徒が自分の言葉で語ると同時に、友だちの考えを知ることにつながっていった。また授業後、生徒は家庭学習を活用して十分な時間の中で落ち着いて自己内対話して、ワークシートに感想や想いをまとめており、こうした取組が作業方略の伸びにつながっていると考えられる。

③表鷲（あらわし）科での取組

特設科目「表鷲科」は、表現力とコミュニケーション力の向上をねらった科目である。活動の中で大切にしていることは、「アウトプットすること」である。自分の思いや感情を表出することは、人間関係の構築だけでなく、学習場面での話合いにも生かされている。鹿野学園は学校教育指針として「表鷲科を基盤に、主体的な学び手を育成し学力向上を図る」としており、本年度の研究主題も「児童生徒の挑戦意欲に火をつけ、主体的に学ぶ児童生徒の育成～表鷲科で培った「やりぬく力」を生かして（output を大切に）～」としている。こうした自らの学びを調整し、最後まであきらめずに取り組む児童生徒の育成が、プランニング方略や努力調整方略の伸びにつながっていると考えられる。

（３）学校での学ぶ時間の確保

①テスト期間中の勉強タイム

テスト期間中は学習時間の確保のため部活動を休みにしているが、「放課後学習の時間」として約１時間設定している。全員参加ではなく希望制ではあるが、ほとんどの生徒が参加しており、生徒はお互いに教え合って、切磋琢磨しながらテスト勉強に励んでいる。一人での学びでははかどりにくい苦手な部分や分からない部分を生徒同士が教え合いながら学んでいる。こうした取組は、柔軟的方略や努力調整方略の伸びにつながっていると考えられる。

②レインドロップ（基礎学力定着学習　６～９年生の取組）

毎日の終学活前の１０分間を５教科の基礎学力学習の時間に設定している。レインドロップとは「雨のしずく」のこと。雨のしずく一滴では何の力もないが、毎日一滴ずつでも落とせば石にも穴があくほどの効果がある。毎日こつこつ努力すれば、やがて大きな力となるという意味で取り組んでいる鹿野学園（旧鹿野中学校から続く）の長い歴史をもつ取組である。レインドロップで取り組む内容は、学期に１回行われるチャレンジテストにもつながっている。この１０分間に、生徒は主体的に自分の課題と向き合い、学習内容を工夫して学び直し、充実した「レインドロップ」としている。「確かな学力をもつ子」の育成という鹿野学園がめざす児童生徒像につながる取組と考えられる。

レインドロップ（基礎学力定着学習）の様子

共に学ぶ楽しさや喜びを味わい、
確かな学力を身に付けた子どもの育成
～米子市立福生西小学校～

１　とっとり学力・学習状況調査の状況

【学力レベル】国語、算数の「学力を伸ばした児童の割合」が県平均を大きく上回る。また、算数の「学力の伸び率」が県平均を大きく上回るとともに上位層、中位層において伸びた児童が多い。

【主体的・対話的で深い学びの実施】県平均を上回るとともに伸びが顕著である。

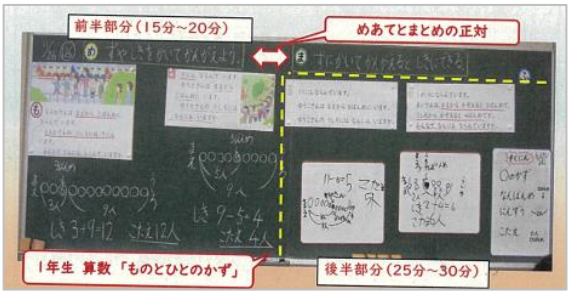
【学習方略】柔軟的方略、プランニング方略、認知的方略、努力調整方略が県平均を上回る。

２　効果があると考えられる取組

（１）「分かる」「できる」授業づくりに向けた取組

①調査結果を活用した授業づくりとタイムマネジメント

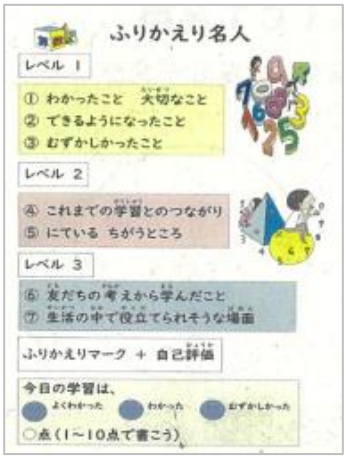
これまでの課題として、教師が問題把握やめあての設定に多くの時間を費やし、児童が適用題を解くための時間を十分に確保できないこと、学習内容は分かっていても自力で問題を解く段階になるとつまずく児童の実態が見られたことが挙げられていた。そこで、とっとり学力・学習状況調査などの各種学力調査や月例テストの分析結果をもとに、児童の学力やつまずきの状況を把握し、指導に生かす取組を行っている。特に算数科では基礎学力の定着に課題が見られたことから、「習得」に重点を置いた授業づくりを進めた。全職員がタイムマネジメントを意識し、適用題の時間を確保できるよう、板書を前半（１５分～２０分）・後半（２５分～３０分）部分に分ける等の工夫を行っている。さらに、学習した知識・技能を用いて類似の問題を繰り返し解くことで、既習事項の定着を図っている。これらの取組が、学力レベルの伸びにつながっていると考えられる。



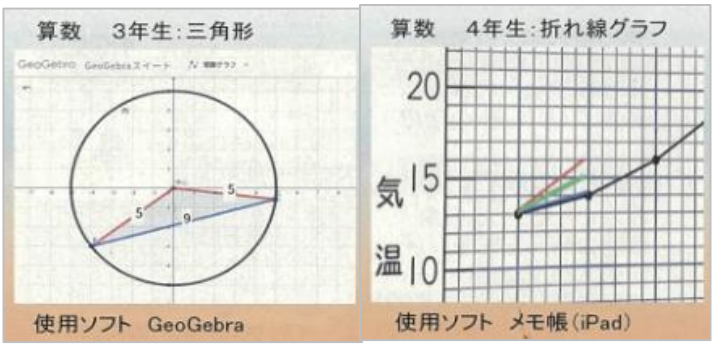
②「めあてーまとめ・振り返り」の質的向上

年度当初の校内研究会で、「めあて - まとめ・振り返り」の質的向上について全職員で共通理解し、算数科を中心に全教科で取り組んでいる。日々の授業から「めあて - まとめ」の正対を意識することでゴールイメージが明確になり、授業内容が焦点化されるようになってきている。さらに、発問によって児童からまとめにつながる言葉を引き出し、キーワードとして色チョークで板書することで、授業の中で児童が自らまとめを書けるように工夫している。

また、振り返りの充実を図るために、「振り返り名人」を作成して授業の中で活用している。発達段階に合わせた振り返りの視点を３段階のレベルに分けて示すことで、児童が学習内容につながる振り返りを書けるようにしている。これにより、教師は振り返りをもとに、児童がどれくらい理解しているかを確認することができる。この実践を重ねることで、児童は今日の学習で分かったことだけでなく、友だちの考えを聞いて自分の考えを広げ、深めることができたことを書くことができるようになってきている。



これらの取組が、主体的・対話的で深い学びの実施やプランニング方略、認知的方略の力を育成していると考えられる。



③ＩＣＴの活用

基礎学力の定着を図ることを目的として、授業の中でＩＣＴを効果的に活用している。

例えば、算数科の「Ｂ図形」領域の学習である第３学年「三角形」の単元では、数学ソフトの「GeoGebra」を使用して円の半径を実際に動かしながら確認することで、２つの半径をどこにかいても、二等辺三角形や正三角形ができることに気付くことができるようにしていた。また、「Ｃ変化と関係」領域の学習である第４学年「折れ線グラフ」の単元では、iPad の付属アプリ「Book」を使用して折れ線グラフの区間ごとの直線を色分けし、始点をそろえて比較することで、折れ線グラフの傾きの大小について理解を深め、数量の増減の様子を捉えることができるようにしていた。

これらの取組が、児童の基礎学力の定着につながり、学習の理解を深めるとともに、柔軟的方略の力を育成することにつながっていると考えられる。

（２）基礎学力を育成する取組

①パワーアップタイム

掃除時間終了後から５校時の授業開始までの１０分間をパワーアップタイムに設定している。内容としては、読み上げ計算を中心に、汎用性の高い四則計算や音読、視写等を組み合わせて取り組んでいる。特に読み上げ計算は、計算力の定着に効果があると実感している。読み上げ計算はペアで協力して取り組むので、自然と子ども同士の関わりも増え、授業中にも積極的に話し合ったり教え合ったりする姿が見られるようになった。また、表に記録を残すことで自分の伸びが分かり、それがやる気につながっている。

これらの取組が、主体的・対話的で深い学びの実施の意識やプランニング方略、努力調整方略の力を育成することにつながっていると考えられる。

（読み上げ計算）
- １人で計算の式を見て、１分間答えを声に出していく。
- ペアで、一方は答える役、もう一方は答えを聞いて確認する役として、１分間ずつ交互に練習する。

②学習コーナー・学習クイズコーナーの設置

授業で使用した教材や公式等を簡潔にまとめたものを「学習コーナー」として全学級に掲示している。「学習コーナー」を充実させることで、授業中にも「学習コーナーに貼ってあったよ」という発言が聞かれることが増えた。このことからも、掲示が児童の知識の定着に役立っていることが分かる。

また、学年のフロアには「学習クイズコーナー」を設けている。算数に関する学習のクイズが掲示されると、そのコーナーに積極的に足を運び、一人で考えたり、友だちと考えたり教え合ったりして学習を楽しんでいる様子が見られる。

このように、学校の至る所に学びの場所があることを児童自らが理解していることが、主体的・対話的で深い学びの実施、認知的方略の育成につながっていると考えられる。

子どもの力を最大限に伸ばし
生徒が誇りに思える学校づくりに向けて
～米子市立後藤ヶ丘中学校～

１　とっとり学力・学習状況調査の状況

【学力レベル】国語、数学の全ての項目が県平均を上回る。特に、数学の「学力を伸ばした生徒の割合」「学力の伸び率」が県平均を大きく上回る。

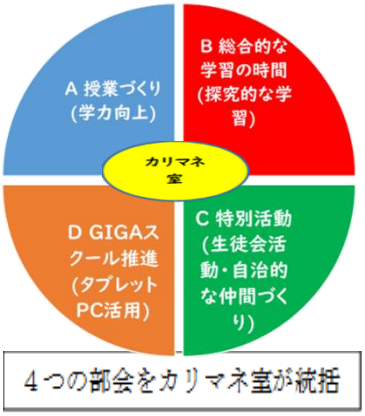
【主体的・対話的で深い学びの実施】県平均を大きく上回る。

【学習方略】柔軟的方略、プランニング方略、努力調整方略が県平均を大きく上回る。

２　効果があると考えられる取組

Ｇ中（後藤ヶ丘中）カリキュラム・マネジメントの推進（カリキュラム全体で全ての生徒の力を最大限に伸ばす全教員公開授業の取組）

研究組織体制を「授業づくり」、「総合的な学習の時間」、「ＧＩＧＡスクール推進」、「特別活動」の４つの部会で構成している。教員がいずれかの部会に必ず所属し、それぞれのチームで役割を果たすことで、働きがいのある働き方改革に結びつけるような取組が行われている。これらの部会をカリキュラム・マネジメント室（カリマネ室）が統括し、全ての生徒の力を最大限に伸ばす取組をしている。例えば、授業づくりに向けた組織的な取組として、教科ごとに研究グループを分け、各グループのリーダーが中心となって、１年間を通して研究を行い、各学期に授業研究会を設け、全教員が研究授業（授業公開）を行っている。また、各学年の教科等を複数教員で担当するため、時間割に教科会の時間を教科別に設定し、日々の授業実践について共有する時間を設定している。このように生徒が学びを深め、最大限に力を伸ばし、習得した知識を活用できる取組を日々チームで考えながら実践につなげている。



Ａ：授業づくり（学力向上）に向けた取組

授業の中で「めあて・学習活動・まとめ・振り返り」の質的向上を図るために、研究職員会では生徒につけさせたい力（Input・Output・Create・Reflect）と「授業の進め方」を全教員が共通理解し、ゴールを明確にした授業づくりに生かしている。特に「めあて」と「まとめ」の正対を意識した学習の展開については、教科会等で話し合うようにしている。さらに、振り返りの質的向上を図るために、生徒に振り返りの視点を示し、次の授業へ向けたステップへとつなげるよう働きかけている。

今回、学力が伸びている数学科の取組を例にあげると、授業の導入では、めあてを提示する前に前時の学習や既習事項を生徒同士で確認させることで、本時のねらいに沿っためあてを作ることができるようにしている。また、学習活動の中では、生徒自身に課題解決をさせるために、生徒同士の学び合いを設定し、主体的な課題解決と全体での考えの共有をさせている。さらに、共有したことを本時のまとめにつなげている。また、振り返りを書く際にも視点を示し、本時の学習で学んだことだけでなく、今後の学びに生かせるような振り返りを書くことができるようにすることで、学習の積み重ねを大切にした授業実践につなげている。

Ｂ：総合的な学習の時間（探究的な学習）

総合的な学習の時間では「地域の課題解決を求め深く学び、社会発展に貢献できる人を目指して」というテーマを掲げ、各学年で探究課題を設定し、総合的な学習の時間に身に付けさせたい４つの力「Input・Output・Create・Reflect」を設定し、生徒と共有している。そのため、生徒自身がこれらを意識し主体的に課題解決に向けて探究することができている。総合的な学習の時間で身に付けた力を各教科等で生かしたり、各教科等で身に付けた力を総合的な学習で生かしたりすることが、目標に向かって成長できる仲間づくりにつながっている。

【身に付けてほしい４つの力】
Input　…気づき課題をつくる力
Output …相手に伝わる表現力
Create　…課題解決に向けて考え作り出す力
Reflect…振り返り、次の学びにつなげる力

Ｃ:特別活動（自治的につながり目標に向かって成長できる仲間づくり）

①生徒が誇りに思える学校づくり

３年間を見据えた目指す生徒の姿を全教員で共有し、学校行事をはじめ、学年ごとに学級生徒会や学級会議などの自治的な活動を取り入れるなど、特別活動の充実を図っている。また、自分たちの学校や学級をより良くしていくために必要なことについて、生徒会を中心に生徒が事前アンケートをとったり、それをもとに話し合ったりするなど、生徒自らが安心・安全に生活できる仲間づくりに取り組めるようにしている。

②生徒の自治的な「生徒会学活」

学期に１回、生徒会執行部が内容を考え中央委員が進行する生徒会学活が実施されている。生徒会学活では、学級の思い出や絆が深まった瞬間を語り合ったり、「ホメホメ週間」を設け、学級の友だちの素敵なところを全員で書いてプレゼントしたり、「ほんわかすごろく」で嬉しかったことや班の仲間のよいところなどを語り合ったりしている。学校行事の前には、学級で毎時間「ありがとう」を伝える取組を行っている。

Ｄ：ＧＩＧＡスクール推進（ＩＣＴの効果的活用へ向けた取組）

特別な支援を必要とする生徒を含め、誰一人取り残すことなく、全ての生徒の力を最大限伸ばすことができるよう、個別最適化を意識したＩＣＴの効果的な活用を推進している。

ＧＩＧＡスクール推進チームを中心とした支援・研修企画・整備等を行い、タブレット等端末を全教員が授業等で積極的に使用し、授業改善に努めている。昨年度は、活用促進期とし、使用することに力を入れていたが、今年度は効果的な活用へとつなげるためにマニュアル等を作成した。さらに、校内研修会等で、校内でのＩＣＴ活用の好事例を確認したり、リモート授業の整備を進めたりするなど効果的な活用について考え実践している。

このように、生徒の持っている力を最大限に伸ばすために、全教員で授業力向上に向けた校内研修や授業公開などに取り組んでいる。さらに、授業の中では、学び合いの場面で自分自身の知識を活用する機会を意図的に設定している。それが、生徒の主体的・対話的で深い学びの実施や学習方略のプランニング方略、努力調整方略の育成につながり、学校全体の学力の伸びにつながっていると考えられる。

また、安心・安全に過ごせる学級や学校の中で、仲間づくりを土台とした自治的な仲間づくりを通して他者を理解し受け入れる経験を積み重ねている。それが、柔軟的方略の育成につながっていると考えられる。

「ねらいにまっすぐな授業づくり」に向けて
自ら考え、進んで表現する子どもの育成
～境港市立中浜小学校～

１　とっとり学力・学習状況調査の状況

【学力レベル】国語、算数の「学力を伸ばした児童の割合」が県平均を上回るとともに、国語の「学力の伸び率」が県平均を大きく上回る。

【学習方略】柔軟的方略、プランニング方略、認知的方略、努力調整方略の伸びが見られる。

【非認知能力】　自己効力感の伸びが顕著である。

２　効果があると考えられる取組

（１）児童の実態を把握し、授業改善に生かす

①とっとり学調の分析を通して、課題改善に向けた取組

昨年度の夏休み中にとっとり学力・学習状況調査の結果を全職員で分析し、学級づくりと授業づくりの双方に生かす取組を行っている。各学級の学習方略及び非認知能力の状況を整理すると、学習方略の「努力調整方略」と非認知能力の「自制心」、「勤勉性」の３つが課題だと分かった。そこで、この３つの課題の中から各担任が学級の課題を１つに焦点化し、その課題を改善するため取り組む具体的方策を考え実践している。この取組は、各担任の授業改善の取組の充実と意識改革を狙って実践している。例えば、自分の学級の課題は「努力調整方略」だと捉えた担任が、課題改善のための具体的方策として「できないことや分からないことを素直に伝えられる環境づくりに努め、宿題や自学の仕方を丁寧に確認して見通しを持たせ、あきらめずに取り組めるように支援していく」ということを学級で実践している。各担任の具体的方策は全職員で共有し、年度末に成果と課題を出し合い、次の学年に引き継ぐようにしている。

②ねらいにまっすぐな授業づくり

「ねらい」と「めあて・活動・まとめ」の整合性を意識し、４５分間の授業を行っている。校内研究の研究教科である国語の授業では、単元構想及び授業構想において、単元で育てたい資質・能力（指導事項）の重点を確認し、各時間の目標に反映させている。また、指導事項をもとに、教材分析し、言語活動を適切に位置づけている。さらに、単元のゴールに到達できるよう各時間においても学習過程を児童と共有し、本時の目標達成に向けて主体的に取り組めるようにしている。

単元構想や学習過程

③主体的・対話的で深い学びの展開に向けた授業づくり

児童が主体的に自分の思いや考えを言葉で語ることができるよう「お気に入りの～」「伝えたい～」「最も～と思う」等のキーワードを用いた問いかけを設定している。また、自分の思いや考えの深まりや広がりに気付かせるため、個で考えた後に互いの考えを交流する場を設定している。そして、教師が授業中の児童の変容を見取り、認める場面をつくり授業を進めている。

（２）学力向上に向けた取組

①学級の力の向上に向けた学習規律チェックシートの活用

全校での取組として、中浜スタンダードを作成し、よりよく学習するための「学級の力」という共通認識で学習規律の定着を図っている。中浜スタンダードには、「時間を守る」「人の話を聞く」「みんなに向けて話す」「学習用具の準備」等、授業中や校内での望ましい行動を具体的に示している。学期末には学習規律を振り返るためのチェックシート（１５項目）で児童と教員のそれぞれが振り返りを行い、教員の評価と児童の評価を比較して学級会で話し合い、その後の指導に生かしている。

学習規律チェックシート（子ども用）・・・担任の先生のみ

担任のクラス（　　）年（　　）組

・１学期のふりかえりをさせてみてください。

・できていたら○、ときどきできていなかったら△で挙手させてください。

・○と△の人数を記入してください。

・先生の評価は秘密の上で子どもたちに挙手させてください。

		○	△
1	チャイムが鳴る前に席に着いていた。		
2	授業のチャイムスタートができていた。（チャイム最後までに）		
3	号令あいさつのやり方はルールのとおりにできていた。		
4	号令・あいさつは元気のよい声でできていた。		
5	いつも、両足をつけて、よい姿勢で授業を受けていた。		
6	発表やお話のときは、話している人を見ることができた。		
7	発表やお話のときは、黙って最後まで聞くことができた。		
8	あてられたときは、大きな声で返事ができていた。		
9	発表したいときは、まっすぐ手を挙げていた。		
10	発表するときは、大きな声で発表することができた。		
11	いつも、筆箱の中身はルールの通りだった。		
12	いつも、算数セットの中身はルールの通りそろっていた。		
13	授業中に、勝手に席を離れることはなかった。		
14	教室移動のときは並んで静かに歩くことができた。		
15	長休憩前はチャイムが鳴るまで教室で待つことができた。		

学習規律チェックシート

②基礎学力の定着の取組

基礎・基本の習得のために帯時間を活用して国語と算数のドリルに取り組んでいる。また、昼読書の時間に勉強をするスタ勉（学期ごとに参加メンバーの調整をして行う補充学習）を行い、学力の定着を図っている。

さらに、家庭学習の習慣化を図るための取組として、全校版の家庭学習の手引きや学年版の自学の手引きなどを作成し、家庭学習で何をすればよいかを示している。この手引きをバリスタウィーク（家庭学習推進週間）で活用することで、保護者との連携にも役立てている。さらに、バリスタウィークと連動し、漢字・計算の基本的な技能の習得を図るための月例テストを実施することで、児童の習得状況を把握することができ、個に応じた支援が可能となっている。

③校内研究の充実

校内研修会や授業研究会等で児童が活発に発言したり、思考を深めたりすることができた場面を取り上げ、なぜ主体的な学びにつながったのかを検証している。例として、特別の教科道徳の授業で心情バロメーター（思考ツール）を活用したことで、児童たちが主体的に学習に取り組んだ事例をもとに検証を行った。ツールを使うことを目的とするのではなく、ツールを使うことで何ができるようになればよいかを話し合い、各自実践につなげている。

普段から職員室等で、児童たちが伸びるために各教科の授業でどんなことをすればよいか、何ができるようになればよいか等を話し合い、児童を伸ばす授業改善へとつなげている。また、全職員が校内研修会や授業研究会等に臨み、児童たちの実態を把握し、課題を焦点化して前向きに取り組んでいる。このような全校での取組が、今年度の学力や学習方略や非認知能力の伸びにつながっていると考えられる。